

～妊娠前に知っておくべき感染症とワクチンのお話～

① ワクチンで予防できる感染症、VPD (Vaccine Preventable Disease)

VPD (Vaccine Preventable Disease) は、あらかじめワクチンを接種しておくことにより予防できる感染症のことです。妊娠中は特定の感染症により、母体自身の感染症重症化や、流産・早産のリスク上昇、また胎児に影響が出ることがありますが、ワクチン接種により感染予防を行うことができるものもあります。VPD についての情報を知っておき、妊娠前に計画的にワクチン接種を検討することはプレコンセプションケアとして重要なことです。

<妊娠を希望される方が知っておくべき VPD とワクチン>

ワクチン	種類	価格 (¥)	当科での取り扱い
風疹ワクチン	生ワクチン	4,253	○
麻疹ワクチン		4,612	△ お問合せ下さい
MR ワクチン (麻疹風疹混合ワクチン)		9,900	○
水痘ワクチン (みずぼうそう)		6,280	○
ムンプスワクチン (おたふく)		4,588	○
三種混合ワクチン (ジフテリア・破傷風・百日咳)	不活化ワクチン ※ジフテリア・破傷風は トキソイド	4,565	○
インフルエンザ ワクチン		4,400	△ 流行期供給状況による
新型コロナウイルス ワクチン	mRNA ワクチン		× 原則自治体での接種

●風疹（三日はしか）

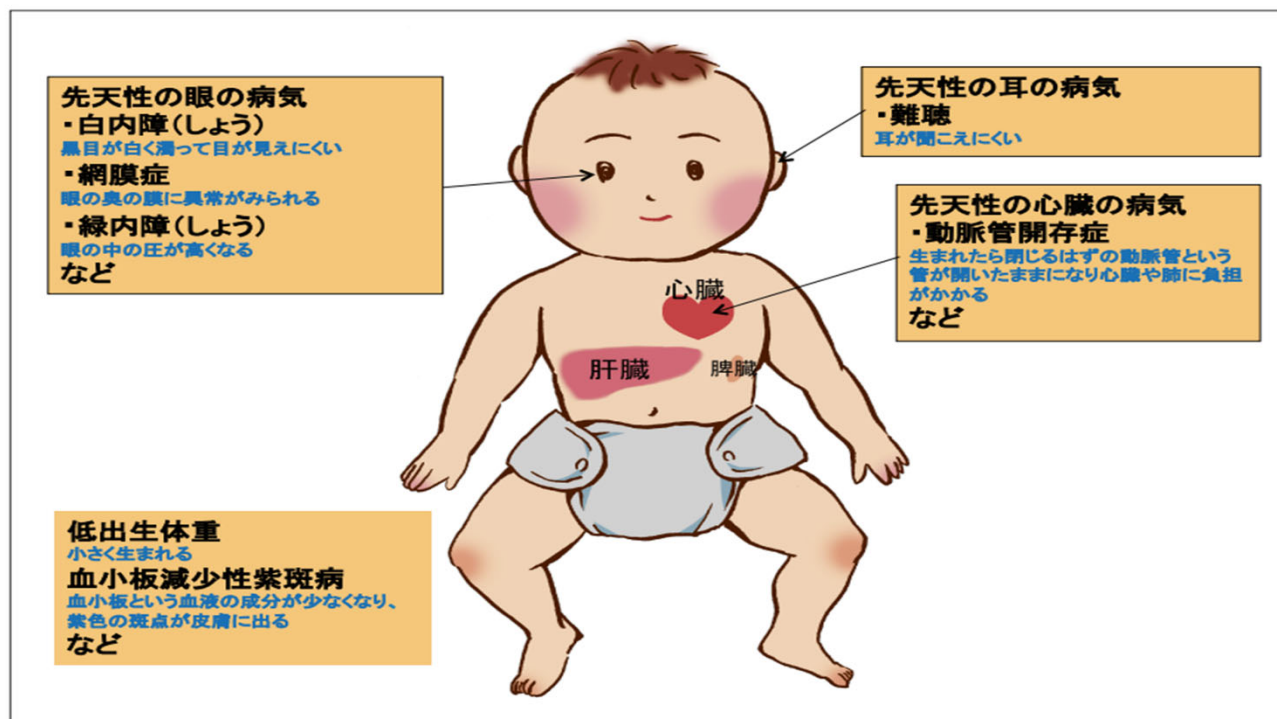
風疹に免疫があまりない女性が妊娠初期に風疹にかかると、風疹ウイルスが赤ちゃんに感染し、赤ちゃんが小さく生まれたり、白内障や網膜症などの目の病気、難聴などの耳の病気、他に心臓の病気になったりすることがあります。これらを総称して、先天性風疹症候群（CRS: Congenital rubella syndrom）と呼びます。風疹に感染した場合に CRS の発生する確率は妊娠週数ごとに異なりますが、特に妊娠 4 週末満の感染では CRS の発症率は 50%以上になります。成人では 15%程度風疹に感染しても症状が出ないことがあり、妊婦さんが無症状でも赤ちゃんが CRS になる可能性はあります。特に 1962（昭和 37）年 4 月 2 日～1979（昭和 54）年 4 月 1 日生まれの方は、幼少時に風疹ワクチンを接種できていない可能性もあるため、一度ご自身やご家族の免疫状態を把握し、ワクチン接種により CRS のリスクを下げましょう。可能であれば、同居家族全員に風疹の免疫をつけることが、妊婦さんおよび赤ちゃんを CRS から守ることになります。

参考リンク：[2022 年“風疹ゼロ”プロジェクト宣言！！ — 毎年 2 月 4 日は風疹の日！！ — 日本産婦人科医会 \(jaog.or.jp\)](https://www.jaog.or.jp/)

（注）1962（昭和 37）年 4 月 2 日～1979（昭和 54）年 4 月 1 日生まれの男性の方は、自治体より無料で風疹抗体検査および MR（風疹麻疹）ワクチンを接種できる可能性がありますので、各自治体にお問い合わせください。

参考リンク：[風しんの追加的対策について | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp/)

先天性風疹症候群の主な症状



「職場における風しん対策ガイドライン」より引用、一部改変
<https://www.niid.go.jp/niid/images/idsc/disease/rubella/kannrenn/syokuba-taisaku.pdf>

●麻疹（はしか）、水痘（みずぼうそう）、ムンプス（おたふく）

成人の感染では症状が出やすく、特に妊婦さんの感染では重症になりやすいです。また、妊娠中に感染すると流産・早産のリスクもあがり、水痘の感染ではさらに赤ちゃんが小さくなったり、小頭症・小眼球症や白内障などの目の病気や発育異常（先天性水痘症候群）を伴うこともあります。これらもワクチンを接種することにより防ぐことができる病気です。

●百日咳（重症化するリスクが高いのは、これから生まれてくる赤ちゃん！！）

百日咳とは、特有のけいれん性咳発作を特徴とする急性気道感染症で、百日咳菌に感染することで発症します。ワクチンで防げる病気の中でも感染力の非常に強い病気で、日本や諸外国でも時々アウトブレイクが発生しています。特に生後0～5か月の赤ちゃんでの百日咳感染者は全体の約10%とここ数年変化はありません。1歳未満で百日咳に感染すると、ひどい咳で呼吸停止してしまうなど、命に関わることもあり、0歳で発症すると半数以上が呼吸管理のために入院加療を必要とします。赤ちゃんは胎盤を通して、お母さんから百日咳の免疫をもらっていますが、成人で百日咳菌に対する免疫を持っているのは7割程度とする報告があり、お母さんも赤ちゃんも百日咳に対する免疫が不十分である可能性があります。この問題を解決するために、海外では妊娠後期に百日咳を含むワクチン（米国の成人用三種混合ワクチンTdap®）を接種し、胎盤を通じて百日咳に対する免疫を赤ちゃんに届け、お母さんも赤ちゃんも免疫がある状態を作ることを推奨しています。日本ではTdap®は承認されておらず、かつ承認されている三種混合ワクチン（DTaP®）を妊娠中に接種することはいまだ積極的に勧められていませんが、妊娠前に接種することで、お母さん・その他ご家族が免疫をつけておく方法でも十分効果があります。

👉妊娠初期の百日咳抗体価が高いほど、赤ちゃんへ移行する百日咳抗体が高く、妊娠前の接種でも免疫をつけておくことで生まれてくる赤ちゃんを守る一定の効果があると考えられます。

●インフルエンザ、新型コロナウイルス

インフルエンザや新型コロナウイルスに感染しても、胎児に障害をきたすなどの影響はありませんが、妊婦さんが感染すると、重症化するリスクがあり流産の危険性などがあるため、ワクチンを接種し免疫をつけておくことが大切です。ワクチンを接種することにより、インフルエンザや新型コロナウイルスの感染予防効果、また感染しても重症化を防ぐ、合併症（肺炎、脳炎など）を防ぐ効果が期待できるため、接種する意義は非常に高いです。

★上記の感染症に対し、いずれもワクチンが提供されており、ワクチン接種をすることにより感染のリスクを下げ、重症化を防ぐことができる病気です。東京医科歯科大学病院プレコンセプションケア外来ではこのようなVPDについて、生年月日、ワクチン接種歴および抗体価測定（採血）な

どから、VPD に対しての免疫が必要十分か検討し、接種しておくことが望ましいワクチンを推奨し、提供しております。ワクチンには生ワクチンと不活化ワクチンがあり、特に生ワクチンは妊娠中に接種ができないため、事前に計画することが重要です。

なお、免疫抑制剤を使用している方は、妊娠に関わらず生ワクチンが接種できない場合がありますので、同居されているご家族のワクチン接種をご検討ください。詳細は外来受診時にご相談ください。

② VPDではないが妊娠中に注意すべき感染症

● トキソプラズマ

トキソプラズマは家畜の肉や感染したばかりの猫の糞や土の中などにいる目に見えない小さな単細胞生物（原虫）です。妊婦が初めて感染した場合は、その胎児に感染が及ぶことがあるので注意が必要です。感染した胎児には、流産・死産、脳や目の障害が生じることがあります（先天性トキソプラズマ症）が、症状も障害の重さも様々です。感染しても無症状であることもあり、逆に出生時に問題がなくても成長するにつれて症状が現れることもあります。トキソプラズマの感染から赤ちゃんを守るために、特に注意すべき点は以下の通りです：1. 生肉・非加熱食品（生ハム・レアステーキ、パテ、ナチュラルチーズなど）を避ける、もしくは67℃以上に加熱する、2. 土いじりや土のついた野菜などを触る場合は手袋・眼鏡・マスクをつける、3. ネコ用トイレの掃除はできれば他の人に依頼する、などです。

● サイトメガロウイルス（CMV）

CMVはいたるところにあるありふれたウイルスです。感染をしても症状が出ないことが多く、日本でも感染している方が多くいらっしゃいます。妊婦が感染した場合は胎児に感染する可能性があり、流産・死産のリスク上昇、赤ちゃんが小さく育ったり、脳や聴力障害などが生じたりすること（先天性CMV感染症）がありますが、症状や障害の程度は様々で、感染しても何も症状がないこともあります。何らかの症状がみられるのは感染時の10～30%です。ワクチンは特にないため、感染予防が重要になります。CMVはくしゃみや咳などのしぶきによる飛沫感染をすることはなく、唾液や尿に触れた手を介してしか感染しません（接触感染）。手洗い・石鹸・アルコール消毒など留意するようにしましょう。また、お子さんから感染する可能性もあるため、おむつ交換、お子さんの食事、鼻水やよだれの処理、おもちゃを触ったあとは念入りに手洗いする、キスは唇や頬派さけおでこにするなど、十分注意しましょう。